

# エコたま グリーンNEWS



多摩市民環境会議機関紙 第145号(通巻第205号)  
2015年3月5日発行 発行人:清水武志朗 編集人:  
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永  
山複合施設 301 (事務局員は常駐しておりません)  
e-mail qqh43+dd@train.ocn.ne.jp  
URL www.ecomeetingtama.jp

## 初のクイズラリーが大受け 多摩エコ・フェスタ 2015



子どもたちがクラフトづくりに夢中

＜多摩エコ・フェスタ 2015＞が2月21日～22日にパルテノン多摩の市民ギャラリーで開かれた。出展ブースはフルに近い24、来場者も21日が450人、22日が401人と両日で850人を超え、過去最高を記録した。

とくにヒットしたのが、今年初めて取り組んだ「クイズラリー」。これは来場した小中学生たちに「来てよかった!」と思ってもらえるようなことをしよう、というのが発想の原点。クイズを出して、場内をまわって特定のブースに貼ってあるその答えを見つけ、正解したら輪切りの枝でクラフトづくりか名札づくりを行うか、孟宗竹を使った竹ぽっくりづくりをするか。

場内でする時間のない人には「持ち帰りセット」も用意したが、けっきょくは時間的に余裕のある子どもたちはほとんど会場内でのづくり、持って帰った。

ひとつ想定外だったのは、対象は子どもだけと思



3人の地図製作者が並ぶ

っていたのに、大人も「セットをもらいたいので、クイズをやらせて」といつてきたこと。子どもたちに対応する予備練習も兼ねるので、それに応じてやってもらった。

そんな大人も入れてクイズラ

リーの参加者は約100名超。

さて、恒例のエコひろばで行う出し物は、21日が多摩動物公園の飼育員さんのお話。これは今年が同動物園のライオンバスが走り出してから50年ということで、ライオンバスの変遷のパネルも展示されていることから、ライオンの女性飼育員に園内でインタビューしたものをDVDで上映した。

つづく「身のまわりの環境地図作品展」の入賞者インタビューでは、この日は多くの学校行事と重なってにぎわった展示ブースの様子



しまったため3人しか参加してくれる生徒がいなかった。地図調製技術協会会長賞を受けた「多摩市立小学校校歌に見られる風景地図」の増田詩南さん(北諏訪小学校6年生)、

あとの2作品は当会議の推薦による「豊ヶ丘野鳥マップ」(豊ヶ丘小学校6年・上野柗さん)、「私たちの学校林」(同小6年・山川明日香さん)だった。



3分野の入賞者や貢献者の表彰

午後には、出展者による活動報告で、都立桜ヶ丘公園・雑木林ボランティアの長久豊さん、多摩循環型エネルギー協会の大木貞嗣理事、森の恵み〇△□もっこの大石亜由美さんの3人がプレゼンテーションを行った。(出展者の活動報告は別掲)

翌日の22日も午前10時30分から「まち美化貢献者・団体」「ごみ減量標語入賞者」「省エネ・創エネコンテスト入賞者」の表彰式が阿部裕行市長の出席のもとで行われた。このうち、まち美化関係では10団体と1個人が表彰された。

午後からは「省エネ出前講座」が多摩市省エネ推進協議会の長谷川さんの進行で行われた。

いつもたくさんのお聴衆を集める「わかりやすい環境学習講座」はテーマが「多摩の自然と生物多様性」で、講師はパルテノン多摩学芸員の仙仁徑さん。講演のあと、ワールドカフェ方式で聴衆が4～5人ずつに分かれ、「20年後の多摩ニュータウンの緑地はどうなっていてほしいか」という題のもとで話し合いを行った。

## 活動報告(1) 都立桜ヶ丘公園・雑木林ボランティア

こならの丘の約1haで、放置されてきた雑木林の再生に取り組んでいる。皆伐更新という循環の手法で、林床に日光を当ててやったらどんな植物が出てくるかとやっている。そのほか伝統の継承



報告する長久豊さん

ということで“めかい”づくり(地元の農家の上手な人に教わった)をやっているが、最近は後継者も育っている。あとはきのこ栽培、サツマイモの栽培などを行う。

谷戸田の景観の復元なども行っている。水田雑草を育て、水生生物の保護などもやっている。イモリが出る。炭焼きも10年ほどやったが、地元の苦情で中止した。

登録した会員は若い人から年配の人まで60名ほどいる。活動日は毎週土曜日。以前は隔週だったが、活動エリアが広がり毎週に、20名前後が参加する。平成3年からスタートしたが、代表者はつくらず、事務局長はいるが各活動日にはその日の担当者という形で行っている。

## 活動報告(2) 多摩循環型エネルギー協会

始まりは3.11だった。それ以前のばらばらだった市民活動を反省し、環境(緑/ごみ/エネルギー)・街づくり・人権なども考えて、形あるもの、仕組みを子や孫へ残そう。そして共有するビジョンをつくらう——と考えたら「市民発電所づくり」へと方向が固まった。

共有するビジョンとは、つながる地域→エネルギーの地産地消、広がる思い→地域を超えて展開する、伝える未来→次世代へ継承するソーシャルビジネスである。エネルギーの地産地消ビジネスで地域を活性化する。→大木理事



もし、多摩ニュータウンの団地のすべての屋根に太陽光パネルを設置できたら、ニュータウンの40%の家庭の電気が自給できるとの試算結果もある。つまり、エネルギーの消費地から生産地に変えることができるのだ。

多摩エネ協の役割は、運動の輪をつくること。このために、環境映画（第4の革命）の上映会や市民エネルギーの勉強会である「エネカフェ」の月例開催、次世代リーダー育成プログラムなどを行っている。

2014年1月には「公共施設への太陽光発電設置については、市内全域の集合住宅、民間施設に太陽光発電を拡げていくための“モデル”とする」という多摩市の方針のもと、市の保有する11施設への屋根貸しが正式に決定。すでに小中学校やコミセン、市営住宅の屋根などに約420kWの太陽光パネルが乗り、それ以前の民間施設と合わせた総発電量は500kW超となっている。今後は民間集合住宅などへの横展開を目指す。（活動報告(3)は次号に）

### ダンボールコンポスト実践結果の持ち寄り



基材を持ち寄りチェック

本紙前号でダンボールコンポストの話を取り上げたが、同コンポストを持ち帰って実践した結果を1カ月後の3月3日に、基材を持ち寄って点検する会が開かれた。食物残渣の投入量が多いか少ないか、内部の水分の割合がどうか、などによって分解の進行速度が変わる。わたしは投入量が少なく、3回投入した結果の内部温度は12℃。

すでに40℃に達している受講者もあると聞いて、マイナス思考に陥る。いずれにしても基材の状態はばさばさなので、水分の添加を行って60%に近づけて発酵をもっと促進させるようにしないとイケないのだろう。（I）

### 一ノ宮用水改修後の水生生物調査報告(中)



橋のコンクリート板の上で調査の準備

また、水深・流速と同様の地点で砂泥やそれに混じる落葉落枝の堆積深を測定した。さらに河床の底質や植物の生育状況を記録した。橋の下であるI-2では、区間の頂点4点の対角線の交点と、交点と頂点の中間点（計5地点）において流速と、6割水深の流速および、砂泥・混落葉落枝の堆積深を測定した。

#### 3. 結果と考察

##### (1) 採集された水生生物

15種類の生き物が採集された。カワムツは今回の調査で初めて記録された。前回に比べて魚類の密度や採集個体数は減少しているのに対して、シオカラトンボ幼虫やアメリカザリガニ、カワリヌマエビ属ヌマエビ類の採集個体数は増加した。絶滅危惧種として、東京都のレッドリストに掲載されているホンサナエ（準絶滅）と環境省レッドリストに掲載されているドジョウ（情報不足）が採集された。多摩地域の他の用水に比べてギンブナが優占することが調査区間の特徴である。

表3 水生生物の採捕個体数

No.	種類名	採集個体数			
		I-1	I-2	I-3	I-4
1	コイ		1		
2	ギンブナ	47	10	11	1
3	フナ属	1			
4	オイカワ	10	3	6	
5	カワムツ	8		3	
6	タモロコ	2		8	3
7	ドジョウ	12	1	10	10
8	シオカラトンボ	2	1	11	16
9	ホンサナエ		1		
10	アメンボ	1			
11	ガガンボ類				1
12	アメリカザリガニ	5		5	47
13	カワリヌマエビ属	601	15	109	845
14	シジミ類				1
15	カワニナ類		6	1	

#### (2) 改修前後のI-3における魚類の密度と体長の変化

魚類は、改修直後の4月には全く採集されなかったが、9月にはギンブナ、タモロコ、ドジョウ、オイカワの当歳魚サイズの密度が高くなった。特に前者3種は水田で繁殖し（皆川ほか、2006）水田周辺の水路区間に分布する（西田・千賀、2004）。したがって、水田との連続性を保全したことが水田で孵化、成長した当歳魚の加入を保障したと考えられる。

#### (3) 橋下の深み(I-2)における生息状況

橋下の深みにおいてコイ（体長421mm）が採集された。また、11月の密度はI-3、4では9月に比べて魚類の密度が減少しているのに対して、I-2では増加した。なお、I-3、4に比べて水深が大きく、キショウブによるカバーの多いI-1でも密度は増加していることから、水深とカバーの確保が越冬に重要であることが考えられた。

このことは多摩地域の農業水路におけるこれまでの知見（西田ほか、2009）とも一致する。I-2で採集された魚類の中には体長70mmを超える比較的大型のギンブナが含まれ、このサイズの個体はI-2のみで採集された。以上のことから、橋下の深みはコイやギンブナの越冬場になる可能性が示唆された。翌年の春に越冬個体の調査を行うことで、橋下深み造成の効果を把握することが必要である。

#### (4) 環境条件の変化

橋下区間(I-2)を除く他の区間では流速が9月から顕著に低下していた。調査区間外におけるキショウブやミゾソバなどの抽水植物の過剰繁茂が水路を堰上げており、このことが流速低下の原因であったと考えられる。堰上げの上流区間ではギンブナ等の魚類の密度が高くなるため（西田ほか、2008）、水路改修の効果を検証することは難しくなる。したがって、抽水植物の生育が旺盛でない春に調査を行うなど、継続的なモニタリングが必要である。また、植物の繁茂は、通水機能の低下をもたらしている可能性が高いため、定期的な刈り取り実施も検討が必要である。橋下区間(I-2)の流速は0~6cm毎秒の範囲と緩やかであった。（次号につづく）

